

大川謙作氏の論文、『抗争する歴史：チベット現代史とその語りをめぐる歴史人類学的研究』は、チベット社会を論じる際に学問分野を問わずほぼ不可避免的に立ち現れる困難の内実を分析し、その知見を前提として、1959年以前のダライラマ政権統治下の中央チベットの社会構成を仮説的に明らかにしたものである。本論文は、「はじめに」と9つの章から構成され、そのうち序論と結論を除く7章は、第1部「チベット問題と「言説の二極化」、第2部「チベット社会論の再検討」に大きく二分されている。

本論文が言説分析と社会構成史研究という二つの部分から成る理由を「はじめに」で予備的に説明した後、第1章では、現代チベット研究の展開を批判的に振り返りつつ、本論文をその中に位置づける作業が行われる。1959年のダライラマ政権崩壊以降、チベットでの調査が出来ない人類学者の多くが、代替民族誌として亡命者からの情報によるチベット旧社会の歴史的再構成に向かう一方、チベットに存在する多くの史料への外部からのアクセスがほぼ不可能になったため、チベット社会研究は歴史学者ではなく人類学者により主導されることとなった事情が説明される。さらに、1959年以降チベットに関する全ての議論が「チベット問題」の影響を受けて二極化している状況にあっては、「チベット社会論」の抜本的再検討を行うためにも、広汎な言説分析の作業によってチベット問題の「文法」を明らかにする作業が不可欠であることが論じられる。

第1部では、チベット問題に関する議論が親中国と親チベットの立場に相互排他的に二極化されるという事態が、3つの領域について詳細に分析される。まず第2章では、チベット問題の背景に経済的要因を見出そうとする種々の「経済言説」が取り上げられ、大川氏が「二極化された語り」と呼ぶものの基本構造が抽出される。第3章では、現代チベット文学の創始者とされるトゥンドゥプジャの小説「化身」の詳細な読解を通して、この小説への様々な批判が、テキスト自体を裏切る形で二極化されている様相を明らかにする。第4章では台湾の亡命チベット人の歴史と現状を現地調査の結果に基づいて整理し、語りの二極化によりこの人々の存在が見えにくくなってきた経緯を明らかにしている。

第2部では、二極化された語りの存在の故に従来十分に検討されてこなかった1950年代の新中国による民族社会歴史調査の報告書を批判的に読み直すことから、1913年から1959年に至るダライラマ政権統治下の中央チベットの社会についての新たな像が提示される。まず第5章では、1951年には「外国帝国主義からの解放」であった筈の中国による「チベット解放」のレトリックが、1959年以降「暗黒の封建農奴制からの解放」へとすり替えられたことが指摘され、1950年代の中国側の資料の重要性が論じられる。第6章では、従来家内奴隷として描かれていたナンセンが、生得的身分ではなく、「周辺の業務を行う者」という職業的特性により定

義される存在であると論じられる。第7章では、チベットの荘園制について、先行研究の述べるところとは異なり一つの荘園の中に複数の権力関係が存在し、また「自営地+保有地」ではなく「自営地+内税地+外税地」という構造を持つ、と指摘される。第8章では、チベット旧社会の平民層ミセーを生得的な身分のみから分類しようとする先行研究を批判し、当人が耕す耕地および耕地がもたらす租税義務に基づいた体系が同在しているという仮説により従来の議論に見られた矛盾を解決すると共に、チベット旧社会が地代と租税の二重構造をとった「分節的」国家であったことを強調する。

結論では、第1部と第2部の議論を再び統合する形で、本論文のチベット社会論に対する貢献をより広い観点から要約し、さらに本論文の行った作業全体を、通常の民族誌を書くことが困難な地域における人類学的営為として、学説史の中に位置づけつつ再帰的に検討している。

大川氏自身が認めるように、本論文は文化人類学の博士論文としてはかなり異例な構成と内容を持つものであるが、その必要性は本文中に説得的に述べられており、またそのような構成を採ることにより、以下の諸点において顕著な学的貢献が為されることとなった。第一に、チベットの文化人類学的研究の展開とそこに見られる困難の性質を、チベットを巡る歴史的展開や隣接諸学との関係をも含めて、明晰に提示したことである。日本語、英語、中国語、チベット語等の文献を縦横に駆使して行われたその作業は、優れたメタ人類学の試みとしても評価出来る。第二に、「二極化された語り」の強力さと、それに回収されない部分の存在とを、経済言説、現代チベット文学、台湾チベット人というそれぞれ意外性のある主題について、詳細な分析に基づいて提示したことである。経済言説に関する先行研究の批判は伶俐であり、チベット文学及び台湾チベット人に関する議論は、新たな研究領域を開拓したものである。第三に、従来十分に用いられていなかった資料に基づき、既存のチベット社会論の寄って立つ前提を批判し、新たなチベット社会像を提示したことである。その主張の成否は、将来チベット自治区に眠っている文書類が公開された後に最終的に明らかになる性質のものではあるとは言え、中国史の故・並木頼寿教授を指導教員とした大川氏の分析は堅固であり、かつ極めて論争的である。

口頭試験においては、幾つかの細かな用語上、表現上の問題点が指摘された他、「チベット解放」言説の変化と中国全体の革命の性質の変化との関係、チベットにおける「文学」概念、言説空間に見られる偏りへの配慮の必要性、インテリではない「普通の人々」の位置づけ、自身のポジショナリティの問題といった点に関して、審査委員から質問がなされた。各審査委員は、それぞれの質問に対する大川氏の回答が、今後の課題とされた部分も含めて説得的であること、及び指摘された問題点はいずれも本論文の価値を損なうほどのものではないことを確認した。審査の結果、本論文が文化人類学の研究に対して重要な貢献をなしていることが、審査委員全員により確認された。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。